

ポカラのカースト・ジョーク：
階級序列の不確定性の視点から

山 本 勇 次

はじめに：

著者は以前本論文集において、「認知的不協和と両義性：笑いの認知的理論に関する一考察」（山本 1986 a）と題する小論を発表した。そこでは、笑いの一般理論に関する梅原猛等の諸説を批判的に検討し、フェスチンガーの認知的不協和の理論的枠組からの笑いの通文化比較研究の理論的可能性を模索したはずである。また、第39回日本人類学会・日本民族学会連合大会（1985年11月30日）においては、「ネパールのカースト序列の不確定性とカースト・ジョーク」と題する口述発表を行った。この口述発表の内容に即したデータ収集等の調査方法論については、別稿（山本 1986 b）において既に触れてある。しかしながら、その発表において取りあげたカースト・ジョークの実際ならびにその分析に関しては、まだ何ら紙面を通じて紹介していない。従って本稿はその必要に当てることにする。本稿の限られた紙面上で著者がネパールの都市ポカラにおいて採集したカースト・ジョークの全体を紹介することはもとより出来ない。その作業は後の課題として、本稿ではポカラに在住する主要カーストに関するカースト・ジョークを一例ずつ列挙しながら、それらをポカラのカースト・システムの動態の脈絡で分析することに焦点を置きたい。ポカラのカースト・システムの詳細については別稿（山本 1983、1985 a、1985 b）等を参照して頂きたい。

著者の年来のフィールドワーク対象地であるネパールのポカラは、首都カトマンドゥから西方200キロにある。その人口は1990年で10万を越えているであろう。小都市ながら、ガンダキ県の県都であり、ネパール中西部の行政・経済・文化の中心地である。残念ながら、ポカラの古い歴史ははっきりとは解らない。ただこの地の先住民がバフン（ブラーマン）とチェットリ達であったこと、インドとチベットの間の塩貿易の中継基地であったことは確かなようである。1950年代になってネパールが開国すると、ポカラも空路でインドと結ばれるようになり、この地が国際観光市場の一端に組み入れられることになる。1960年代に入りポカラ盆地のマラリヤが駆逐されると、周辺の山地に住んでいたグルンやマガール等モンゴロイド人種系諸民族集団がポカラに移住しはじめる。

1970年代になりシッダルタ高速道路が出来てインド国境に近いパイラワと、更にプリティビ高速道路が完成してカトマンドゥと結ばれると、ポカラは急速に国際観光都市として

成長して行くことになる。ポカラを世界中に広めたのは、ひょっとしたらアメリカン・ヒッピーかもしれない。ヨーロッパ・アルプスにさほどの新鮮さを感じなくなった欧米の若者達は、ヒマラヤのトレッキングに東洋の神秘を求めて、アノラックに登山靴姿で続々とポカラに押し寄せるようになった。1990年代の現在、ポカラには年間30万人の外国人観光客が世界各地から訪れている。永久冠雪のヒマラヤのパノラマとフェワ湖の景観、そして多種多様の民族集団 (ethnic group) の混住するエキゾチックさこそポカラの豊かな観光資源なのである。

ポカラのカースト・システム：

カースト制度はインドが元祖である。日本の徳川幕府時代の土農工商制度もインドから流れてきたカースト・システムの亜流だというアメリカの学者もいる。インドの隣国ネパールにカースト制度が今も残っていると、何ら不思議はあるまい。残っていると、法律上は廃止されているから、人々の生活慣習として見られるに過ぎない。とりわけ上級カーストの人々ほどその規範を守ろうとする。現在でも結婚するなら同カーストの相手とすることが期待されているし、食事を共にするのも異なるカーストのものとは避ける傾向がある。しかも、家族姓を聞けばその人が何カーストに属するかを、現地の人なら90パーセント以上の確率で当てることができるから、カーストはネパール人の儀礼的かつ社会的な「顔」の一部でもある。

カースト制度は、浄・不浄価値の先天的な配分による「儀礼的」階級制度なのである。階級が上位ほど清浄であり、それが下位なほど不浄であるとされている。ポカラのカースト・システムは、インドのバルナ・モデル同様、四つの階級から出来ている。最高が「バフン (ブラーマン)」、その次が「チェットリ」、中間が「マトワリ」、そして最低が「ナチュネ (アンタッチャブル)」である。また、それぞれの階級の中には更に「ジャート」と呼ばれる基本的単位により幾つかに分かれている。同一の階級にある異なるジャートの間ではどちらがより上位にあるかに関して、様々な意見があるが統一した見解はない。

バフンとチェットリとは、バルナ・モデルのブラーマンとクシャトリアに各々対応するとされるが、彼らはともにネパール語を母語とするインド系地中海人種である。マトワリ群では、ネワール、グルン、マガール、ボテ、タカリ等があり、これらはチベット・ビルマ語系の言語を有したモンゴロイド系人種であることも周知の事実である。(ネワールに関しては、この点色々な説がある。) またアンタッチャブルの間では、ダマイ (洋裁師)、カミ (鍛冶屋)、スナール (金銀細工師)、ガイネ (辻音楽師)、クマレ (瓶造り)、カサイ (肉屋)、ポデ (漁師)、ミヤ (イスラム商人) と職業的分化が多彩である。

どこの国にも不平等な社会的制度は色々ある。最も一般的に見られるのは、金持ちと貧乏人という「経済的」階級制度であろう。共産主義はこの階級制度を理念的に撃ち破ろう

とした。そして、資本主義社会では一方で自由競争によりそれを拡大再生産しながら他方では福祉の名の下でそれを克服しようという逆方向の努力を営むシステムでもある。いまここでは、ネパールの伝統的なカースト制度が儀礼的階級制度であり、本来的に経済的階級制度とは違っていること、そして階級制度には儀礼的なものと経済的なものとの2種類がある事実を明確にしておきたい。

都市化による変容：

1950年以来このかた近代化、西洋化の大波がヒマラヤ山麓まで打ち寄せることが続くと、1970年代のポカラでは都市化の荒波が渦巻くようになる。その渦巻きに吸い込まれるようにして外国人観光客が大挙押し寄せ、周辺山地から職探しのネパール人達が群れをなして移住しつづける。そして、この都市化の渦こそ百年以上も続いたポカラの伝統的なカースト社会を変容させるものであった。この変容を儀礼的階級制度と経済的階級制度との食い違いの発生として把握することが肝要であろう。

先住民である上級カーストのバフンとチェットリとは、ポカラの肥沃な農地を占有してきた。その結果、彼らはポカラで最大人口の集団となった反面、多産奨励と男子均分相続を数世代繰り返すことにより彼らの農地は細分化されてしまうことになった。彼ら一家族当りの所有農地が家族全部が一年間に消費する農産物の生産にぎりぎりの限界状況になった頃、1970年以降のポカラの激しい都市化・貨幣市場化が襲いかかるようになる。このうねりの中で消費水準の上昇欲に駆られた彼らは現金収入の道を農業以外に求めだしたのである。子弟に高等教育を付け官僚に出来た家族は上昇への夢をむさぼることが出来るが、役所の小役人のポストでは、辛うじて生活するに足るだけの給料しか貰えない。しかしながら、そうでないバフン・チェットリ達は、右往左往しながらもいつしか借金地獄に陥りやがて父祖伝来の田畑を切り売りする羽目に陥ることが多い。バフン・チェットリの経済的転落はこうして始まっている。

一方で、ポカラのマトワリ達は後発移住民である。潤沢な土地を探せない彼らは、バフン・チェットリのような農本主義を捨てて商業活動に活路を見いだすことになる。ネワール達は早くからカトマンドゥ盆地で貨幣市場社会の洗礼を受けており、そのカトマンドゥのネワール商人とのコネを利用して彼らは、ポカラの都市化・貨幣市場化の波に乗って、自分の商売を伸ばすことに忙しい。

グルンやマガールにはグルカ兵として就職の道が開けていた。インド陸軍や英国陸軍での12年間の軍役を済ますと年金がつく。年金が付くようになると兵役を終えて本国に引き上げ、給料の積立金と退職金をはたいてポカラの土地を購入し家を建てて定着する。その後は自給自足農業をしたり、借家を建てて大家暮らしをしたり、兵役時に覚えた技術で商売に乗り出したりして各々の年金の額に応じた多彩な道を選ぶことになる。

タカリはその昔ドーラギリ山麓のタコーラ地方に定住し、塩貿易の独占で経済的な基盤を作り上げる。チベットが中国領下に入ると、ポカラ、カトマンドゥ、バイラワに降りてきて色々なビジネスを始めるようになる。特に、ポカラでは塩街道沿いの「パッティ（木賃宿）」の経験を生かして、フェワ湖周辺で小さいホテルを営業しはじめ現在のポカラ観光産業の基盤をつくることになる。

このような経過を経て、現在のポカラでは儀礼的階級の上位にあるバフン・チェットリよりも、その下位にあるネワール、グルン、タカリの方が経済的により優勢となる傾向が目立つようになる。正確に言えば、バフン・チェットリの一部が経済的に上昇するものと、経済的に下降する多くのものとに両極分解する狭間に経済力を付けたマトワリ達が割り込んで来たことになる。従って、ある部分ではバフン・チェットリとマトワリ達の間には儀礼的階級と経済的階級の逆転現象が起こり始めたと言っている。もちろん、この逆転現象をポカラの住民達はそれとなく実感している。カーストの上下関係の問いかけが以前の伝統社会のように一元的でなくなった。彼らは、階級の序列認知の「曖昧性」という問題に直面することになったのである。昨今の政治的変動はもとより、それ以前から既になんとなく落ち着きのない不安定感をポカラの人々は感じだしている。

カースト・ニックネーム：

金持ちのネワール商人と貧乏なチェットリの農民とどちらが上位なのか？以前のようにストレートに答えられなくなった。このような階級の序列認知の曖昧状況が一方で顕在しはじめ、他方で急激な人口流入で何カーストか解らない見知らぬ人々がどんどん増加する。これまで長い間続いてきた伝統的カースト・アイデンティティーが階級の序列認知の曖昧性とカースト境界の曖昧性とのダブルパンチで崩れ始めたと言えよう。ポカラの住民達にはそのような曖昧状況のもたらす不安定な心理状況を切り抜きたい潜在的欲求がある。そんなときに有効なのは、伝統的なカーストのステレオタイプなイメージを日常生活の中で絶えず定着させる行動であろう。カースト・ニックネーム（あだ名）の社会的機能は、他カーストのステレオタイプなイメージを固定させると同時に、それが異カースト間社交の場で尊称的用法として使用されることにより「社交の潤滑油」としても機能することがある事実注目したい。

バフンには、「パンディット」というニックネームがある。パンディットとはヒンドゥ教の儀礼を行う司祭のことで、このニックネームが年寄りのバフンに使われると尊称になるが、若いバフンに向けられるなら蔑称になることが多い。その他にも、バフンには「タパレ」の蔑称がある。バナナの葉などで編んだ宴会用の大皿を「タパリ」と言うが、ポカラの人々は家でヒンドゥ儀式を行う際このタパリに供え物を入れてバフンのパンディットを招くのである。儀式が終わるとパンディットは謝礼としてその供え物を貰って帰るので

あるが、欲張りなパンディットはタバリごと持って帰るといふ。だから、バフンの欲深ぶりを嘲笑して、「タバリまで持ち帰る人」という意味で、タバレが彼らの蔑称になったのであろう。

チェットリには、「カジ・サーブ」という尊称がある。カジ・サーブとは、昔の役人への呼掛けである。彼らの蔑称としては、「カスの血を引く者」という意味で「カシア」がある。「カス」とは、ネパールがヒンドゥ化される以前から住んでいた原住民で、モンゴロイド系の民族であったというネパールの学者もいる。従って、この蔑称はバフンがチェットリに使うもので、純正なサンスクリット文化の後継者であるバフンが、その紛い者のチェットリを軽蔑する意味で使用されるのである。

グルンには、「ムキヤ（村長）」という尊称がある。とりわけ、元グルカ兵達は自分の兵役の頃の階級に尊称を添えた「キャプテン（またはルテナー）・サーブ」という類の尊称を喜ぶ。また、彼らの「ジャディヤ（飲んだくれ）」という蔑称があるのは、軍隊生活で飲酒を習慣化させて帰国後も大酒を飲むものが多いからであろう。「ベデ（羊）」という蔑称も彼らにはある。これは、グルン達の羊のように集団行動に走りやすい民族性がからかわれたものらしい。

ネワールには、「サウジ（店の旦那）」の尊称がある。また、彼らには「コーデ（稗飯喰い）」という蔑称がある。これは、ネワール達が家では米飯でなくて「コード（稗）」を食べていても外では米飯を食べたように吹聴する性行を嘲笑している。更に、「ククラ（鶏）」という臆病者に宛てられる蔑称が彼らには向けられる。

そのほか、タカリには「スッパ」（タカリ族内の名門家族の呼称）の尊称と、「ボテ」（チベット難民）という蔑称がある。マガルに関しては、「リド」（尻尾のない家畜のこと）という蔑称で名高いし、ギリには「マガンテ」（乞食）という蔑称、ガルティには「ドレ」（雲助とでも言うべきか、駕籠かきのこと）の蔑称がそれぞれある。

アンタッチャブルにも、蔑称が多い。ダマイやカミは、伝統的に結婚式の際に楽団役をするので、そのドンチャカやる太鼓の音から来ている「ダム」という蔑称がある。サルキには、牛の死体処理をすることから「チャマレ」（牛の尻尾）という蔑称がある。ミヤは、イスラム教徒で幼児期に包茎処置をする習慣があるので、「チュラテ」（包茎男性）という蔑称を付けられている。ただ、商売繁盛で多忙なダマイの洋裁屋に関しては、「ダルジ」（マスター）という尊称でもって呼ばれることが多い。

以上のように、ポカラの主要カーストの各々には「ウッパナム（あだ名）」が付けられている。そして、これらのカースト・ニックネームは、異なるカーストとの社交上機嫌取りの尊称や、ルサンチマンを晴らす為の蔑称と使い分けられるのが特徴である。しかしながら、そのいずれを取っても、その対象となるカーストの伝統的な特徴（例えば、その職業的特質とか民族的個性とか）を象徴する言葉として、そのカーストのイメージを「ス

テレオタイプ」化するという社会的機能があることに注目されたい。カースト・ニックネームは、そのカーストのステレオタイプなイメージを作り上げ固定させる「エスニック・マーカー (ethnic markers: 民族集団表象)」(Hannerz 1974: 37) として機能していると言えよう。更に、この事実は、カースト・システムがエスニシティ研究と同様の理論的枠組みで行われてよい (山本 1985 a : 33、1985 b : 54) という著者の年来の主張を支持するものとも考えられる。従って、カースト・ジョークの研究はエスニック・ジョークの研究と何等変わるところがないはずである。

カースト・ジョーク：

カースト・ニックネームには尊称・蔑称の両義的性格があるが、カースト・ジョークには対象となるカーストの肯定的特徴を捉えたものは一般的に見あたらない。ただ、チェットリが自分達のカーストを対象としたカースト・ジョークには自己賛美的な肯定的特徴が見られる。しかし、チェットリ達が話す他のカーストに関するジョークは全てがその対象カーストの否定的側面を誇張している。従って、対象カーストの相対的劣性を嘲笑することこそ、カースト・ジョークの核心となる。この限りにおいて、カースト・ジョークも梅原猛 (1973 : 14) の言う「価値低下」の構造を有すると言えよう。

また、カースト・ジョークには対象カーストの価値低下が彼らの伝統的な社会的役割や属性に起因されるのも確かなことである。従って、対象となるカーストの否定的側面を強調して、そのステレオタイプなイメージを固定するという社会的機能に関しては、カースト・ジョークもカースト・ニックネームと変わりがない。以下は、著者がポカラ在住のチェットリ達から採集したカースト・ジョークの一部である。紙面の関係から詳しい注釈は避けなければならないし、ジョークとしてはまだまだ洗練されていないが、ポカラの人々の素朴な笑いを想像して頂ければ幸いである。今後の調査では、チェットリ以外のコミュニティで話されているカースト・ジョークをも採集し続けるとして、ここでは、チェットリの視点からの分析をも付け加えておきたい。

〈例 1 : バフンに関するもの〉

太古人類が農耕を開始しだした頃、稲は籾を付けることなく生米が実ったという。その頃のある日、一人のパンディットがある村人の家へ「スラッダ (ヒンドゥ教徒の命日の追悼儀式)」の「プジャ (祈祷)」に招かれた。プジャが終わると、その家主はパンディットに沢山の御馳走を出した。そのパンディットは痩せていたけれど、出された御馳走を全部ペロリと平らげてしまった。満腹すると彼はそそくさと家路に着いた。

パンディットは家路への途中稲田の横を歩いていた。その稲田は刈入れ直前で自

分の稲田よりもたわわに生米を実らせていた。彼は、その見事な稲田を見ているうちに、また腹が減ってきたようであった。それで、こっそり味見をしてみる気になって稲田の中に入って、おいしそうなところをあっちこっち生米をもいでは口に放り込んだ。

このようなパンディットの行いを「クル・デバタ（土地の神）」が見ていた。「これはいかん」神様は思った。「こんな奴がたくさん増えると、刈り取る前に米は全部食べられてしまう。なんとか対策を立てなければ！」そこで、思案の末、クル・デバタは籾を発明した。それ以来人間は脱穀する手間に煩わされるようになったのである。

言うまでもなくパンディット（ヒンドゥー儀礼司祭）はバフンにしか出来ない社会的役割である。例1は、そのパンディットの異常な食欲を通してバフンのどん欲ぶりをからかったジョークである。しかもバフンは、「カト（ひょろ長い火起し木）」と称されるように、その体型は一般に痩せてひょろ長い。そのような形質的特徴を前提として、このジョークは彼らの「痩せの大喰い」ぶりを嘲笑している。しかも、神話風にアレンジされて、神の為に宗教的儀式をするパンディットが土地の神に愛想を付かされるという下りがおかしい。この例でも、バフンのステレオタイプな属性（①パンディットという伝統的役割、②痩せたひょろ長い身体）と彼らに特徴的と言われる性格（③ずる賢く、よく深い）が要素となって組み立てられていることに注目したい。

バフンに関するカースト・ジョークは数量的にも多い。そのいずれもが上記①②③の特徴を持っている。チェットリからすれば、バフンにはある種の近親憎悪的感情があるようである。タガダリとして多くの共通性を持ちながらも、自分達より常に上位であったバフンに対して一般的にチェットリはある種の劣等感がある。この劣等感に根ざした緊張こそ、チェットリ達がバフンに関するジョークをもってバフンを蔑笑するのである。しかも最近では、共有地の所有等を巡ってこの二つのカースト間の経済的緊張関係は高まっている。

〈例2：チェットリに関するもの〉

昔、バフンやチェットリには「マス（肉）」を食べる習慣がなかった。あるカトリ・チェットリの家では、幼ない子供が「チチ（マスの幼児語）」を食べたがっていた。ある日、父親と遊んでいた子どもはチチのことを思いだし、今日こそ食べさせてくれとせがんだ。父親は息子の言い分をかなえてやりたかったが、その方法にはたと困った。（注：アンタッチャブルの肉屋へチェットリの男が買いに行くのは、世間体が許さない。）そんな父と子の会話を一羽の鳥が、興味をもって近くにとまった。

その鳥を見て、父親は一計を思い付いた。彼はゴロリと横になり口を開けたまま寝たふりをして、口から舌を出したりひっこめたりしだした。鳥は、男の口元で出入りする赤いものに興味を持った。だんだんと寝ている男のところ近づいて、やがて男の胸の上に乗る、舌をつついてみようと口の中にくちばしを突っ込んだ。その瞬間、その男は口を閉じて、鳥のくちばしをくわえ両手で鳥の体を押さえた。こうして父親は息子にやっとチチなるものを食べさせたのである。

チェットリ達が話すチェットリに関するカースト・ジョークには、自己カーストの劣性をあぶり出して自嘲するものも皆無ではないが、その多くは自画自賛的側面が濃厚である。例2は、ネパール人が賢い鳥とみなす鳥をチェットリの男が知恵罫で手掴みする話である。ある種の手柄話であり、息子思いの父親を持ち上げるところもある。もし、ジョークを価値低下説に限定すれば、例2はジョークとは言いがたい。

しかしながら、例2の登場人物がカトリ・チェットリである事実に注目したい。カトリ・チェットリは、バフンとチェットリとのカースト通婚により出来たチェットリ内のサブ・カーストである。このチェットリ内のサブ・カーストにもカースト・ランキングを巡る不確定性があり、ラナ・チェットリとかタバ・チェットリのような純正チェットリ(他カーストとの混血がない)の方がカトリ・チェットリのような合の子チェットリよりもステータスが高いとする見解もあるし、逆に後者の方は上位カースト・バフンとの混血であるから、前者の純正チェットリよりもより上位にあるとする見方もある。要するにカースト・システムの原則であるカースト同婚を逸脱したカトリ・チェットリの儀礼的地位を巡ってサブ・カースト間の階級認知の曖昧性が存在する。これ故に、チェットリ内のマジョリティである純正チェットリから劣性視されたカトリ・チェットリがジョーク内に登場したものと考えられる。

現在は昔ほど厳密に守られていないが、上位カーストでは肉は不浄な食べ物として節制されてきた。従って、上位カーストのチェットリがたとえ子供であれ、肉食を促すということは、カースト規範の逸脱を意味しており、それ故、このジョークは価値低下の構造を持っている。従って、例2では他者の目をかすめて、こっそりと悪いことをする賢いバフン同様の劣性がカトリ・チェットリにも付与されて、純正チェットリがカトリ・チェットリを蔑笑するカースト・ジョークとなっている。

〈例3：ネワールに関するもの〉

ネワールの若者が軍隊に入った。隣国が攻めてきたので、彼の所属する連隊も敵を迎撃に行かねばならなくなった。戦場に着くとすぐに戦闘が始まったが、この若者は恐くて恐くてたまらない。そこで、同じ連隊の戦友が夢中で戦っている間に、

彼はこっそりと戦場から逃げだしてしまった。しばらく歩くと川が見つかったので、そこに降りて敵の眼から身を隠す場所を探し始めた。すると小藪が見つかったのでその中で隠れようとした。藪には「チュトロ（鉤のような棘のある植物）」が生えていた。彼がその中に分け入る途中で、一つのトゲが彼の軍服の襟首にひっかかった。男はびっくりした。直ちに「敵がやってきて自分の襟首を掴んだ」と思った。もう今にも撃たれると思い、必死で神様にお祈りをした。しばらくしても何事も起こらないので、自分を捕まえている敵になんとかして命ごいをしようと思った。それで彼は泣きながら前方に向かって「ナマステ（挨拶）」をし、「私はあなたと戦う意志が全くありません。どうか命だけは助けて下さい。どうかその手を離して下さい。」と涙声で頼んだ。

何の変化もなかった。敵は答えもせず殴りもせず撃ちもしなかった。しかし、それでも恐くて後ろを見ることが出来ずに、幾度も幾度も命ごいを繰り返した。一時間ほどしても何も起こらなかったの、やっとゆっくり恐々後ろを振り向いた。敵兵らしいものは一人もいなかった。そして、自分の襟首を掴んでいるのがトゲであることが解ると、彼は立腹してトゲに向かって悪態を付いた。「おまえだと知っていたら、直ちに射ち殺してやったのに！」

ネワールの臆病さを嘲笑するジョークは、ほかにも沢山ある。量的には一番多いが、内容は単純で、臆病さの誇張という共通点が見られる。例3も同様である。軍隊というのは勇気の奨励される場であり、臆病者にとっては最も不向きな組織であろう。兵役に付いたネワールの新兵が、その臆病さ故、敵前逃亡という軍人としては最低の行動をしてしまい、おまけに後方のトゲを敵兵と勘違いして命ごいをするという間違いをしでかす。最後にトゲに向かって強がってみせるという落ちまでが付く。

ネワール人の臆病さはバフン・チェットリのコミュニティでは定評があるが、それを説明するのに、ネワールの居住状況を出すチェットリがいた。ネワールは一カ所に密着して住むのを好む。これは、弱い動物が群れをなして強い動物から身を守るのと同じ理屈である。バフンやチェットリは田畑をはさんで個々に独立した家屋に住む傾向があるのに対して、一カ所に密集して家屋を建て、その家屋の中でも幾家族かが階や部屋を分け合って密接な共同生活をするネワール人の生活パターンはバフン・チェットリの眼には特異に写るのであろう。更に、チェットリがネワールを臆病とみなす根底には、彼らの王（現在のシャハ王朝）がカトマンズ盆地のネワール諸王国を軍事的に征服したという歴史的事実があることも付け加えたい。

しかしながら、少なくともポカラでは、このようなバフン・チェットリの農民や小役人達がネワール商人に日常生活の物資購入で縛られている事実を忘れてはなるまい。その未

支払いの付けが貯って、土地を切り売りしなければならない貧困層のバフン・チェットリにとっては、ネワール商人は鬼のような守銭奴に見えるのも確かな事実である。そうすれば、ネワール人に関するカースト・ジョークがチェットリ達の間でも最も喜ばれることも容易に理解できよう。

〈例4：マガールに関するもの〉

バフンやチェットリの間では「スラッダ（命日の祈祷儀式）」というヒンドゥー儀式が著名である。山奥から降りて町に住み始めたマガールの男が、このスラッダの儀式に興味を持ち、自分の家でもやってみようと思った。そこで父親の命日にパンディットを招待してスラッダを行う手配をした。

その日、早朝からパンディットが訪れスラッダが始まった。パンディットは、家中の地面に「ジャギヤ（路上に描くマンダラ図）」を描き、その一方に自分が座り、そのマガールに自分の対面に座るように命じた。そこで、男はそうした。それから、パンディットは男に「私の言う通りになさい」と命じたが、この男はネパール語が余り解らない。「私の言うことを繰り返しなさい」と解した。それで、男はパンディットが何を言ってもその言われた通りを一生懸命おうむ返しに言い返した。

何を命令しても、男が繰り返すだけで何等命令に従わないので、パンディットは腹が立ってきた。パンディットはついに立ち上がり「おまえは馬鹿か」と言った。マガールも同様に立ち上がり「おまえは馬鹿か」と言い返した。いよいよ頭に着たパンディットは、マガールの頭をポカリと殴ってしまった。するとマガールも真似をしてパンディットの頭をポカリと殴り返した。すっかり立腹したパンディットは儀式を開始したばかりなのに悪態をついて帰っていった。マガールは同様の悪態を返しながらパンディットを見送った。そしてマガールは、「なんだスラッダはこんなに簡単なのか！」とその終了に満足した。

その翌日、マガールは習慣通り、「シッダ（お礼の料理）」を準備し昨日来てくれたパンディットの家を訪問した。しかし、パンディットはマガールの顔を見るや否や腹を立ててマガールの顔面を張り倒しシッダも受け取らずにそのマガールを家から追い返した。とぼとぼとシッダをわが家に持ち帰りながらこのマガールは思った。「スラッダは簡単だが、シッダを返すことは難しい。」

マガールは働き者だが、頭の回転が遅いというイメージがある。カースト・ニックネームは「うすのろ」であった。バフンやチェットリの家では子供が馬鹿なことをすると「マガールと同じことをするな」と言って叱りつける。例4では、このマガールの「サンスクリット化 (sanskritization)」の失敗を蔑笑するジョークである。サンスクリット化とは下

級カーストが上級カーストの生活様式を真似して自分達の日常生活に取り入れる過程であるが、ここではスラダの儀式に焦点が絞られている。

グルンとてマガールと同様であるが、チベット・ビルマ語系諸語を母語とする彼らはバフン・チェットリの母語であるネパール語を苦手とする者も少なくない。現在では都市に在住するマトワリ達は殆ど流暢なネパール語を喋るのであるが、バフン・チェットリの耳にはマトワリのネパール語は、なまりや文法的ミスがあって、今でもバフン・チェットリの蔑視の対象となる。この事実が例4のジョークの核となっている。それ故、スラダの儀式の実体も知らずに、それを形式的に真似しようとするマガールを冷笑するチェットリの視線がこの例から浮かび上がってくる。通常スラダは何時間もかかる複雑な儀式であり、それに比べてシダを帰すことは実に単純で容易なことなのであるが、このジョークでは両方の儀礼的難易度が逆転させられており、この点にヒンドゥー儀式に関するマガールの無知が象徴的に表象されている。

おわりに：

わが国における徳川三百年の安泰は、商人階級の経済的優勢と武士階級の経済的困窮とを同時にもたらした。従って、その後続く「明治維新」の変革を、幕藩体制という日本的カースト制度の中で「儀礼的」階級制度と「経済的」階級制度の間の矛盾が生み出した「摩擦エネルギー」の産物と位置付けることは間違っていない。そして、開国40余年のネパールにおけるカースト制度の変容は、わが国が体験したのと同様の儀礼的階級制度と経済的階級制度との矛盾・逆転が生成するエネルギーを蓄積しつつある。1990年春以来のネパールの民主化騒動の底流には、このような歴史的エネルギーが充・放電を繰り返している事実を見逃してはなるまい。ネパールの現在は日本の明治維新に相当すると言っていい。首都カトマンドゥを離れてポカラにいと、そのエネルギーがフィルターなしの鮮明さで見えてくる。

ネパールでは昨年11月に新憲法が公布された。このたびの憲法改正には、王権を縮小して英国のような「君臨すれど統治せず」の立憲君主制にすること、ヒンドゥー教の国教規定を廃止して信教の自由を確保すること、パンチャヤートー党民主主義を放棄して多政党民主主義にすることの三つの目玉があると言われているが、現時点の著者はまだ新憲法の内容を知らない。全てが順調に行くならば、今年の4月に多政党民主主義の新憲法の下で総選挙が実施される予定なので、その総選挙に合わせて各政党が現在活発に票集めに奔走しているはずである。そして、この政党の集票活動の中で、潜在的な疑集能力を持つカーストは最大限に利用されているはずである。本稿において、著者はカースト・ニックネームとカースト・ジョークを紹介したが、それらはこの様なネパールのカースト・システムの変容と政治体制の民主化への動きに呼応してその社会的機能が論じられなければなるまい。

旧来のカースト・システムが変容する過程の中で、前述した通り階級序列の認知の不確実性が問題になってくる。カースト・ニックネームには特定カーストの本来的イメージを固定させるステレオタイプ化の機能がもたされている。カースト・ニックネームが両義的なのは、このステレオタイプなカースト・イメージを利用しあいながら、異カースト間交際を上手にやっていくというポカラの住民の生活の知恵なのであろう。カースト・ニックネームは、異カースト間交際の潤滑油としての一面を持っていると言えよう。

カースト・ジョークにしても異カースト間交際を維持してゆくための方便であると思えることが出来る。日本人社会で頻繁に見られる「表と裏」の使いわけが一つの参考となる。ある特定の人に対して、その人と直接に対面しているときには「調子」を合わせるが、その人のいない裏では陰口を言って冷笑する類の社会的交際の型がこれに近い。カーストの階級逆転等により、より優位にあったカーストは、新興の他カーストに対して、ある種の恐れとルサンチマンを抱く。しかも、その他カーストに対して公然として敵対行動をとってルサンチマンを晴らすことははばかれる。従って、この他カーストの不在の場において（自分と同カーストのもの同席の場が多いが）そのカーストに関するジョークをお互いに披露しあいながら、日頃の溜咽を下げるのが通常である。異なるカースト間のルサンチマンこそカースト・ジョークの源泉であり、またこの様な方法で異カーストに対するルサンチマンを日常的に解消しているからこそ、それが溜り貯って暴力沙汰になるまでに至らない。アメリカの都市に比べて極端に少ないネパール人社会の無暴力性の秘密がここにあるのかもしれない。

竹沢によるエスニック・ジョークの研究（1988：368-390）では、米国でのマイノリティのイメージをステレオタイプ化するものとしてエスニック・ジョークの社会的機能が注目されている。前述したように、ポカラのカースト・ジョークも同様の機能を持つことは間違いがない。また竹沢は、同じ論文において、米国の広告用漫画などにおけるエスニック・イメージのステレオタイプ化の側面をも紹介しているが、商業用広告の未発達なネパールではそのような側面を探することは出来ない。ただ、竹沢論文では米国のエスニック・グループ間の政治・経済的緊張関係があまり触れられていないので、エスニック・ジョークが生産され継承されていく社会心理的側面がまったく解らない。

本稿では、ポカラという実際の多民族複合都市において採集したカースト・ジョークを、カースト・システム内の緊張関係の動態論の視座から考察することにした。カースト・ジョークは諸カースト間の潜在的緊張関係を緩和する言語的ゲームという側面をもつというのが、本論の結論でもある。従って、カースト・ジョークが異カースト間の緊張を「バーバル」な手段で緩和する社会心理的機能を保有している事実を忘れてはなるまい。

ネパール人は穏和な国民性を持っているから過激な革命が起こることはあるまいというのが、私の見解である。ただ私のポカラの文化人類学的研究から注目されることは、彼ら

の持っている曖昧状況への強い精神的耐性、理念を掲げて暴走することのない寛容な精神、場当り的な超現実主義である。ヒンドゥー教メンタリティの由縁だと言ってもいい。経済的階級と儀礼的階級との矛盾から派生するエントロピー増大の不快感を笑いで解消することで、社会的・政治的変革に対して彼らを駆り立てるエネルギーを充電している回路の一部を絶えず放電させて、エネルギー蓄電の速度を極めて巧みに緩めているという感が、私にはする。この小刻みに多発する変動エネルギーの放出は、もしかすると彼らの生活の知恵かもしれないし、また逆に外国からの援助漬けで自国経済の立て直しが長年出来ずに来た彼らの怠慢さかもしれない。いずれにしても、これはネパール人自身の問題であり、長年のネパール・ファンの私に出来ることと言えば「ネパールの明治維新来たれ」と祈ることの他に術は見あたらない。

〈参考文献〉

- 梅原 猛 1972 『笑いの構造—感情分析の試み—』角川選書61
- 竹沢泰子 1988 「アメリカの合衆国におけるステレオタイプとエスニシティ」『民族学研究』52巻4号、363-390頁
- 山本勇次 1983 “Inter-Caste Marriages in Pokhara: Sanskritization or Urbanization”『アジア・アフリカ言語文化研究』25号、1-38頁
- 同 1985 a 「階級とエスニシティ：ネパールのカーストは利益集団か？」『文化人類学』1巻2号、74-92頁
- 同 1985 b 「マトワリ・チェトリ再考：反サンスクリット化か？」P. R. Sharma、三瓶清朝、山本勇次（共著）『ネパールにおける言語・文化・社会の動態』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、49-106頁
- 同 1986 a 「認知的不協和と両義性：笑いの認知的理論に関する一考察」『活水論文集』第29集、65-83頁
- 同 1986 b 「ネパールのカースト社会とカースト・ジョーク」『九州人類学会報』第14号、31-35頁
- Hanners, Ulf 1976 “Ethnicity and Opportunity in Urban America” in Abner Cohen (ed.) *Urban Ethnicity* Tavistock; London, pp. 37-76

1991. 1. 31. 受理